

くだ たま
管玉

—海を越えた弥生文化の装身具—

紅葉山33号遺跡出土の細形管玉（写真1）は、続縄文文化前半期（紀元前4世紀～紀元1世紀ごろ）の墓壇から出土したものです。円筒形をした石製ビーズの種で、特に石製の管玉は弥生時代から古墳時代を代表する装身具として知られています。

石の種類をみると緑色の碧玉質と赤色の鉄石英があり、出土状況からもとは2色をつなげたネックレスのような装身具であったとみられます。1982年の発掘調査の記録によると、細形管玉と一緒に、白色の環状製品1点が、もろい状態で土の中から確認されました。それは、ペンダントのように付いていた可能性がります。

細形管玉の大きさは、長さ9mm、18mmほど、小口面の外径は3mmに満たないものがほとんどで、さらに内径1mmほどのひもを通す孔を管状に開けています（写真2）。貫通する孔は精巧な技術で作られ、表面は磨いて仕上げられています。これらは、当時の石狩で製作されたものではなく、本州の弥生文化圏から持ち込まれた貴重品で、その石材は北陸（新潟県佐渡島の猿八産か）に由来する可能性が指摘されています。本

州で確認されている弥生時代の管玉製作遺跡では、管玉の製作途中のものをはじめ、研磨するための砥石や穿孔用とみられる石針や鉄針なども出土しています。紅葉山33号遺跡の細形管玉を見ると、きれいに仕上げられているため製作時の加工痕が肉眼ではほとんど分りませんが、小口面から石針を回転させて孔を開けたものと推測されます。

約二千年前の日本海沿岸地域の交易の中で、北陸地方から東北地方を経て北海道に持ち込まれた管玉のかわりに、石狩から本州へと運ばれていった物資とは何でしょう

か。また、物流を通じた人々の往来は双方にどのような影響を与えたのでしょうか。その歴史をひもとく手がかりが、日本海に面する石狩の遺跡にも秘められていると言えるでしょう。

（荒山千恵）



写真1 紅葉山33号遺跡の細形管玉／
続縄文文化
（出土した21点のうちの12点を
連ねたもの）

写真2 細形管玉の大きさを
つまようじと比較
（手前の細形管玉：現存
長さ18mm・外径2.8mm）



石狩市学芸員
荒山千恵 Chie Arayama

専門分野は考古学。遺跡の発掘調査をはじめ、出土した木の道具、音の考古学などの研究を行う。